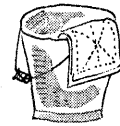


# たけのこのかか煮

「かあさんの味」という小さな料理の本をばらばらとめくっていると、「たけのこのかか煮」というおもしろい名前があったので、作り方を読んでみた。

ゆで方が詳しくのった上、味つけして、コトコトコトコト煮つまるまで煮るといのである。こういう料理に、「かか煮」という名前がついていること、母親が、昔はこうして、手をかけて料理を作ったという代名詞をおもしろいと思った。

料理は代表で、他の家事も手をかけてやったことであろう。しかし、現在では、キャベツの油いためが、「かかいため」かもしれない。そんなに手をかけてつくることがなくなってきた。特に、夫が留守になり、子どもと一緒にだけになると、手のかからない簡単な料理ですませることが多い。夫は、気むずかしいから



## 鈴木都志子

料理に気をつかうので、潜在的には、手のかかる料理はおっくうだと感じる私たちである。

また、婦人向けの情報をみても、家事はできるだけ合理化して、余暇で文化的なものを吸収しようとけしかけてある。「家事は、誰でもやれる仕事だから、自分が生きているという生きがいを感じない、外で働きたいのだが夫が許さない」とある家庭婦人は悩んでいる。たしかに、家事の中から、その家庭独特のもの（手作りのもの）という要素が、少なくなってきた。そのことは、家族だけでなく、主婦業をしている人自身をも、味けなくしているのだと思う。

祖母の時代は、子どもたちに着せる緋あかの着物を母親（祖母）自身が、図案を考えて織ったという。たとえ忙しかったとしても、

昔は、家事の中に女性の人間としての基本的欲求を満足させる創造性や独自性があったのである。

現代、男性が、大企業や社会の歯車の一部になってもつ悩みは、家事という職種を受けもつ女性においても、共通の悩みとなつてきているのである。スーパーに行けば、冷凍食品あり、できあいのフライがありサラダがあり、さてまた献立つきで材料を配達してくれる会社あり、料理の分野だけでも、家事の他の分野と同じく、大量生産化し、個々の家庭から企業へと、計画、製造過程が移っていつてきているのである。

その社会の機構の中で、手をかけた料理を作ったりする意欲が、自分にもないことを感じる。それどころか、男性は相手をするのが大変だが、ひとりでは淋しいし、かわいいから子どもは育ててみたいと未婚の母になりたい気分になったことさえある。ただ、子どもの側から考えてみると、片親とか私生児とかいう条件におかれるわけで、未婚の母とは、全く母親の一方的なエゴイズムの結果だと、思いなおしただけである。

未婚の母と同じエゴイズムの結果といわれるものに、核家族の問題がある。しかし、私は、現代の諸問題を核家族という結果にとらわれることはきらいである。昔も、長男だけが親と同居したわけで、他の子どもはみな、現代でいう核家族だったわけであ

る。それも親に対して子ども数が多かったから、社会の家庭の数の中で核家族が占める割合は、現代より多かったかもしれないのである。だから、年寄りが同居していいという結果に、諸問題の原因をおくことよりも、同居しようとしなさい、同居してもうまくいかないという精神的背景を諸問題の原因として、二男、三男にも共通のものとして考えたい。

未婚の母や、核家族を望むという方向と同じように、苦勞することが苦手だということに共通して、コトコトコトコト、たけのこを煮つめる料理をすることが、私たちには苦手なのである。

しかし、この手をかけた味、骨身を惜しまぬ奉仕の精神みたいなものが現在の母親には欠けているのではないだろうか。(それは、形を変えて、夫という男性自身、また子ども自身にも欠けていることであるが)

もちろん、合理的に家事を片付けて、どんどん勉強し、社会的活動もする理性的な、家庭経営者になろうという現代の女子教育を否定はしない。母親、妻というものには、理性も必要だと思ふ。

しかし、コトコトたけのこを煮た昔の母親にも、チエという形で、妻として、母として育児の面にも、しっかりしたものがあつたのではないだろうか、もちろん乳児の死亡率ひとつをとって

も、昔は迷信や衛生知識の不足などあげられよう。しかし一方、現代の母親に欠けてきている語りつがれたチエのようなものも、

同時に失なつてきている感じがする。少し前、私は、専門的保育者が育てる集団保育のよさを認め（もちろん、家族という小集団の中で形成されていくものも認めながら）母親になるにも、適性があると考えたことがある。育児というものも一つの職業、したがって適性があると認め、適性がある女性は家庭で子どもを育てたり、保育の道にすすみ他人の子どもを育てる仕事をし、適性に欠けるといふか、適性がほかにある女性は、どんとん子どもをあずけて、他の仕事で社会に貢献すべきだと考えた。（もちろん、過渡期である現在には、どこにも望ましい保育施設があるとは限らず、望ましいもなにも、全く無いところさえある）また、父親は、外で仕事をしながら、親としての立場をとれるのだから、母親もできるはずだ、愛情があれば、短かい接触で十分なのだからとも考えた。

しかし、それもこれも、みな、私の、女でも外で働きたいというひとつの快感を求める欲望を認めさせるためにつけた理屈だったように、たけのこのかか煮を読むと思えてくるのである。

たけのこのかか煮をきっかけとして、自分が母親にいたいという思慕の深さを感じてみた。すると、母という役割は、それだけ

で一生を費してもいいほど偉大なものではないかと思えてくるのである。

ただ、私の母にも同じ悩みはあったようである。学生時代、留学の道もあったのに家庭の事情で閉ざされ、結婚してからも、初めは共働きして教職についていたが、母の言うには父の協力が足りなくて、やむなく職をやめ家庭に入ったという。母は家庭に入ったことを涙を流してくやしがつたことがあった。家庭に入ってみると、やはり人間として、家庭だけでは何か物足りないことがある人もいるのである。特に最近ではその数は多い。

その理由として、女性でも一個の人間としても社会的欲望に加うるに、それを実現する道として、女子にも高等教育が一般化された、また家事が簡略化された余暇時間が増えたことと共に、社会の側からも、労働力を必要とし、その手は家庭婦人にも及んできたという説明できる面があるだろう。また経済的事情から、豊富な物資を手に入れて、高い文化生活をしたいと思ったり、物価高とうなどで、共働きを余儀なくされている場合も多いだろう。諸事情で婦人労働が多くなっている現在、その中で、もう一度、家庭の味、母親の味を思いなおしてみることがないだろうか。そして、女性が、社会に出て労働するとしても、本来母親のあるべき味を失わずに、何かに動かされて外に働きにでるのではなく、

自分自身の生き方として働くべきだと思つたのである。その実現のために、男性の職場の側からも、共働きの場合、夫が家事や育児にも従事しやすい条件が満たされる必要があるだろう。

育児の問題は、母親が家庭にいてというだけでは片付かない。母親自身の適切な保育に加えて、集団保育は、すでに乳児期から必要性を認められようとしている現在である。家庭に婦人がいるとしても、乳幼児集団保育は必要かつ適切なものになっていかねばならないのである。

家事はどんどん合理化されていくだろう。しかし私たちは、本来に意義と、自分自身の欲求というものから出発して働かねばならないと思つし、家庭の中は、ただ、企業によって合理化されるのではなく、夫や子どもが、ひいては主婦自身も満たされる独自の味を作ることが大切だと思う。

何か、見返りがないと、行うことをやめてしまう現代の私たち、そこから出発すると、昇進した夫の帰りが遅くなり、夫婦の対話が少なくなり、子どもも大きくなって母親から何か離れていくように感じると、欲求不満になり、夫を叱りつけて家事を手伝わせ、また、子どもにも代償を求め、進学競争や塾通いへと叱りつけるようになる面もあると思う。

見返りがなくてもする母親の労働、その中には、いちがいに前

近代的だと一笑できない、母親自身も満たされるものがあるように思う。家事の中に、もつともつと創造性や独自性を盛りこまねばならない。

たけのこのかか煮をコトコト作ってやる気になれば、家事は一日家にも、時間が足りないほど忙しい。

現代の女性には、家事だけでは満たされない知識や教養が身についたといえ、欲求不満の説明がつくのであろうか。何か、そう割りきっていけない魅力が、たけのこのかか煮というひびきにあるのである。

そこで保育者にもお願いしたいのは、この現代は家庭でも子どもたちは味わえないでいるたけのこのかか煮の味を、子どもたちに与えてやってほしいということである。

そこには何かある、また昔の子どもたちは何か身に吸収したと思つたのである。現実には毎日の保育の中で、たけのこのかか煮の味がどう実現されるのかは、保育者一人一人の実践の中にあると思つた。ゆめゆめ保育雑誌にのっているカリキュラムを、そのまま機械的に個々の園児に適用したりなどしてはならないのである。

(静岡県立厚生保育専門学院)